学校法人 松翠学園
滋賀文教短期大学
SHIGA BUNKYO JUNIOR COLLEGE

保育者養成校における音楽表現方法の発展的展開 ～ドラムジカの実践による検証 ～

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-09-29 キーワード (Ja): キーワード (En): Musical Expression Activities, Teaching Method of "Expression" Field, Creative Drama Music Activities 作成者: 藤山, あやか メールアドレス: 所属:
URL	https://s-bunkyo.repo.nii.ac.jp/records/95

保育者養成校における音楽表現方法の発展的展開
～ ドラムジカの実践による検証 ～

The evolutionary development of musical expression method in a childcare worker training school
～ Verification by the practice of “*Doramuzika*” ～

藤山あやか
Ayaka TOYAMA

抄録:
幼小接続期の音楽教育を担う幼稚園教諭の資質・能力の育成に向けて、表現領域に関する学問分野の専門性を習得するため、創作音楽劇を教材とした授業モデルを提案している。まず、戦後音楽教育における創作指導の歴史的変遷を概観し、創作活動において音楽リテラシーを重視する流れのもとに学習内容が変容していることを確認した。そして、創造的音楽学習の方法論を整理し「幼児と音楽表現」における学習内容への応用を検討した。これらを踏まえ、創作音楽劇「ドラムジカ」の授業実践による成果と課題を見出すことで、教員養成段階で身につけるべき音楽的能力について論じている。

Abstract:
This paper suggests the model of classes with the creative drama music activities for the training of kindergarten teachers who take on the responsibility of musical education between kindergartens and elementary schools. This model makes it possible to acquire the expertise in kindergarten education by repeating theory and practice. Based on the analysis of historical transition of the creative drama music activities, the significance of the expressive activities that encourages infants’ sensibility and creativity will be discussed.

キーワード: 音楽表現活動、領域「表現」の指導法、創作音楽劇
Keyword: Musical Expression Activities, Teaching Method of "Expression" Field, Creative Drama Music Activities

１． はじめに

平成 31 年度４月より、全国の幼稚園教諭養成課程を有する大学等において、文部科学省により示された教職課程コアカリキュラムに基づき編成された新教育課程がスタートしている。新課程で新設された「領域及び保育内容の指導法に関する科目」では、領域論と指導法から構成されるカリキュラム編成が求められており、保育教諭養成課程研究会は、教職課程コアカリキュラムに準じたモデルカリキュラムを開発するとともに、これらの指針に基づく具体的な授業内容を提案している[1]。「幼児と表現」のコアカリキュラムに示されている一般目標では、「領域『表現』の指導に関する、幼児の表現の姿やその発達及びそれを促す要因、幼児の感性や創造性を豊かにする様々な表現遊びや環境の構成などの専門的事項についての知識・技能、表現力を身に付ける」[2] ことが明記されており、到達目標では、保育者を目指す学生自身が音楽に関する知識及び技能、表現力を身につけることを目的とした内容が明記されている。

現在、ほとんどの保育者養成校や保育現場で、子どもの音楽活動にピアノが用いられていることに対して、岡田（2018）は、ピアノを用いない音楽表現活動についてのレパートリーやイメージが乏しいことを指摘しており、ピアノにこだわらない多様な活動展開の意義について論じている[3]。また、小池 （2017）は、学生の音楽力量養成を目的とした「音楽をつく

る」作業から、「音楽リテラシーの主体的な学び」「保育現場に有用な指導的観点の学び」「グループワークによる協同的な学び」において効果が得られることを明らかにしている[4]。これらの論考を踏まえ、幼児の音楽的な表現を支えるために身につけるべき指導法は、学生の音楽リテラシーを基盤として、学生自身が創造的な音楽体験を通して体得していく必要があると考える。

筆者はこれまで、アクティブラーニングの授業実践として創作音楽劇「ドラムジカ」を取り上げ、総合的な表現活動を展開するための教材として、その有用性を検証してきた[5]。そこで、多様な表現媒体を用いて学生の主体性・創造性を育むという視点から、創作音楽劇「ドラムジカ」を教材とした授業モデルを提案するとともに、創造的音楽学習に基づく理論と戦後音楽教育における事例を踏まえて、教員養成段階で身につけるべき音楽的能力について論じる。

２．　創造的音楽学習と「モノドラマ合唱」

創造的音楽学習 (Creative Music Making, 以下 CMM)は、イギリスの作曲家・音楽教育家であるジョン・ペインターが提唱した創造的音楽づくりである。島崎 (2010)は、創造的音楽学習を「子どもが多様な音素材を活用して即興的に音を探求しながら経験創作によって音楽を創る学習であり，子どもの主体性や聴く力の育成，多様な音楽様式の追究による音楽観の拡大を促すことができる学習である」[6] と定義している。日本で創造的音楽学習が注目されたきっかけは、1982 年に、ジョン・ペインターとピーター・アストンによる「Sound & Silence」を、山本文茂らが「音楽の語るもの」に邦訳し出版したことである。さらに、1989 年３月告示の第６次学習指導要領では、創造的音楽学習の理論が反映された「ひびきをつくる」学習が取り入れられて以降、日本国内の学校教育においても創造的音楽学習を念頭に置いた多様な実践が展開された。

創造的音楽学習の実践の一つとして、山本文茂の「モノドラマ合唱」[1] が挙げられる。モノドラマ合唱は「語り」、「バックミュージック」、「合唱」の三要素で成り立っており、国語科と音楽科の学習を統合させた指導モデルの事例である。国語教材に取材した「語り」に、その内容に合った「バックサウンド」や「バックリズム」、「バックメロディー」、「バックハーモニー」を子どもたちが楽器等を用いてイメージする音を創作し、最後はピアノ伴奏付合唱曲に編曲して「合唱」するという構成になっている。山本の創造的音楽学習の学習における理論は、表現媒体の吟味、構成要素の理解、形式原理の感得、様式感の育成の要素から成り立っている。「モノドラマ合唱」は、表現活動と鑑賞活動を融合させながら、児童生徒の直接的創造体験を通してあらゆる種類の音楽にアプローチするペインターの CMM[7] の一部であり、「ふしをつくる」活動と「ひびきをつくる」活動を統合する表現形式としている[8]。ここでは、特に表現媒体の吟味と「ひびきをつくる」学習内容との関連性に着目したい。山本は、表現媒体を「音素材」と置き換え、音素材の選択に一定の秩序と制御を盛り込むことを必要としており、「モノドラマ合唱」においての表現媒体は、①響きをなるべく同質化すること、②異質の響きを持ち込むときは慎重に行うことを大原則として、音素材の形式や性質を入念に整理・区分している[9]。

戦後音楽教育における創造性育成の流れを概観すると、1951 年の学習指導要領 (第２次試案)で「創造的表現」という学習領域が登場したことが創造性教育の始まりとなっている。「創造的表現」の学習は、低学年では周囲の音を声や楽器を使用して模倣させるなど子どもの生活を取り巻く環境と音楽を関連づけた活動が行われ、創造的表現のための基礎的能力の定着を図るとともに、高学年では歌唱・器楽・鑑賞の各領域で用いた教材を活用した「劇化」による学習が実践された[10]。当時の学習は、音楽の様式感には十分に触れていないなど創作指導に課題が残ったが、子どもたちの生活と音楽を密着させ、多様な音素材を探求することから子どもたちの主体性・創造性を育成し音楽劇による創作活動を通して音楽教育から他教科との学習の総合化を図ったことは注目に値する。創造的音楽学習に代表される実践として、即興の取り組みに焦点をあてた田中 (2000)は、戦後音楽科教育の即興の実践は、創造性の伸長を主眼に実践された時代から、徐々に「音を音楽へと構成する」構成原理を主眼に置く創作の実践に変化していると論じている[11]。1958 年告示の学習指導要領より、創作活動において音楽リテラシーを重視する流れから学習内容が変容していることからも、幼児の音楽表現に関しても、身

近な音を身体や楽器を用いた単なる音の模倣に終わらせない音楽表現方法の拡張を試みる必要があると考える。

３．　保育における創作音楽劇と教材

保育において劇的な表現活動が行われるようになったのは、1948 年、保育要領で幼児の保育内容 12 項目「見学、リズム、休息、自由遊び、音楽、お話、絵画、製作、自然観察、ごっこ遊び・劇遊び・人形芝居、健康保育、年中行事」が示された頃である。清水 (2021)は、保育における劇的な表現活動の変遷を概観し、1989 年の幼稚園教育要領第２次改訂で従来の練習や技能向上とみられる指導内容から、子どもの表現を支えるための内容や方法を見直す動きとなったことを踏まえ、表現活動を支える保育者のかかわりに視点を置いた教授内容を検討する必要性を論じている[12]。そこで、子どもたちと保育者との関わりから遊びを発展させるための手立てとして、創作音楽劇を用いた学習内容について検討したい。

前項で、創造的音楽学習の実践の一つとして「モノドラマ合唱」を取り上げた。創造的音楽学習の方法論は、「音楽の様式的特質の決め手となる表現媒体（表現手段・音素材)、構成要素（物理特性・要素概念)、形式原理（語法・技法・音組成）の各々に対して子供に経験創作を行わせ、即興的・創造的自己表現としての音楽づくりを進めた後に、同様な様式的特質を持った既存音楽や作曲家作品を検証楽曲として設定し、子供の活動との切り結びを行う、極めて合理的・本質的・教育的な方法論よって成り立っている」[13] ことに独自性が認められている。一方、「モノドラマ合唱」の方法論は、理論と実践の総合的学習を実現させたものの、指導者の音楽的技量と知識が求められることや、作曲家の支援が不可欠であることが課題としてあげられている。保育現場における表現遊びへの応用を考えた際にも、同様の音楽技能を保育者に求めることは不可能であり、創造的音楽学習の方法論をそのまま適応することは困難である。しかし、学生の主体性・創造性を育むという視点から教授内容を考えると、創作音楽劇をツールとする学習は多角的視点から音楽表現の知識・技能を習得できると考える。特に、学生自身が音楽表現の基礎要素となる音素材への感性を育み、身の回りの音の特徴や多様性への気づきを深めることで音楽表現の発展的展開を可能にするのでないか。これらの視点を踏まえ、創作音楽劇「ドラムジカ」を用いた授業実践の成果と課題を検証したい。

４.「ドラムジカ」を用いた授業実践

４．１　「ドラムジカ」の概要

「ドラムジカ」[2)] とは、「歌」と「歌」の間をナレーションやセリフでつなぎ物語を進めていく音楽劇である[14]。使用する歌は、子どもたちが日常の中で親しんでいるものなど既知の楽曲を用いるため、子どもたちは自らが題材を選択することが可能であり、幼児教育における表現活動への導入も容易であることが大きな利点である。また、挿入するナレーションやセリフは、日頃の子どもたちとの会話を繰り広げて創るため劇中にアドリブを入れて物語を進めていくことができ、即興表現をする面白さや楽しさを体験することができる。さらに、ミュージカルやオペレッタとは異なり、台本から背景や小道具の制作などの活動に至るまで保育者は子どもたちと関わり合いながら進めていくため、子どもたちが主体性を持って表現活動を展開できることが特徴である。

４．２　「ドラムジカ」の創作方法

受講生を３つのグループに分け、各グループ 15 分程度の物語を創作する。題材となる曲は、学生がグループで相談して決め、取り上げる楽曲は保育現場で知られている作品で子どもたちが歌える曲であることを条件に選曲させ、使用楽器はピアノや簡易楽器（カスタネット、タンバリン、鈴など)の他に、授業内で紹介した民族楽器等も可能とした。また、当授業で習得した学習内容（わらべうた、手遊び等の遊び歌、オリジナルリズムを用いた器楽合奏、手話を用いた合唱活動な

ど)を取り入れて、グループで意見を出し合い工夫を重ねながら作品を創作した。

４．３　学生アンケートによる「ドラムジカ」の検証

令和３年度春学期に本学２年生 19 名を対象に実施した「音楽Ⅱ（音楽表現法)」の授業での取り組み内容と成果を述べるとともに、今後の課題を検討したい。「ドラムジカ」は、当該授業における総合的な学びとして、多様な表現媒体を活用し学生同士で音楽表現の可能性を探求させることを目的に、第 13〜16 回目にかけて行った。授業後に実施した学生アンケート結果及び感想により、音楽表現活動を行うための指導法として「ドラムジカ」の有用性を検証したい。

４．４　学生アンケートの結果と考察

アンケート項目は「幼児と表現」のコアカリキュラムに示されている到達目標を参考に設定し、５段階評価と記述式による回答とした。

設問	項目	非常にそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全く思わない
1	多様な楽器の音色や奏法に親しむことで、表現の多様性を知ることができたか。	41%	59%	0%	0%	0%
2	様々な表現を体験することを通し、自らの表現を工夫することができたか。	18%	53%	29%	0%	0%
3	身近な環境と関わる中で、音楽表現の可能性について考える事ができたか。	35%	41%	24%	0%	0%
4	わらべうたや歌唱、簡易な楽器の演奏を通して、音楽表現の知識技能を向上する事ができたか。	35%	59%	6%	0%	0%
5	幼児の育ちや保育のねらいに合った教材やそのアレンジの仕方について考え実践することができたか。	12%	47%	41%	0%	0%
6	合唱や合奏など創作活動などを協働して表現することを通じて、他者の表現に共感し、学び合うことができたか。	47%	53%	0%	0%	0%
7	授業での活動を行う中で、幼児の表現の姿を想像し、幼児の表現活動にどのように応用されるのかという視点を持つことができたか。	41%	47%	12%	0%	0%
8	活動の映像を見て、自分や他者の音楽表現から学ぶことはあったか。	41%	47%	12%	0%	0%

表１　「ドラムジカ」の学生アンケート結果

アンケート結果より、まず、８項目の評価点の平均値が 38 で総合計 45 点の約 84％であることから、受講生は「ドラムジカ」の活動に興味・関心を持って取り組めたことが分かる。設問１「表現の多様性を知ることができたか」については、全員が「非常にそう思う」「そう思う」と回答しており、記述欄には「様々な国の楽器に触れそれぞれの楽器の音の違いを知ることができ、普段触れることのない楽器の叩き方やリズム感を楽しむことができた」「音楽はピアノを弾いたり歌ったりすることだけではなく、何かを演じることも一種の音楽なのだと思った」などの感想があり、多様な楽器を活用した音楽活動の経験が、表現の多様性を知るきっかけとなったと考える。設問２「様々な表現を体験し、自らの表現を工夫することができたか」では、29％の学生が「どちらでもない」を回答した。これは、ピアノ以外の演奏を経験したことがない

学生が大半を占めていたため、多様な楽器を用いた創作活動は経験したものの、自らの創意工夫を取り入れた発展的な活動が十分にできなかったことが要因にあげられる。一方、「ピアノでも様々な効果音や音が出ることや、音楽を取り入れた遊び活動ができると思った」との感想があり、普段は「歌の伴奏楽器」として認識されるピアノの捉え方に変化があったことも読み取れる。設問３では、具体例として、風の音や雨の音を楽器や身の回りのものと音楽表現の関わりをあげた。大半の学生は、身近な環境との関わりから音楽表現を考えることができたと回答している。「ドラムジカ」の創作過程では、自然音や環境音など身の回りの音を様々な楽器や声を用いて再現し、効果音としてストーリーに取り入れるなど自ら音素材を探求する姿が見受けられた。授業ではペンタトニックの音階を用いたピアノの即興演奏や、劇中で活用できる効果音の演奏を実践したが、より発展的な音楽表現活動を実践するために、ピアノ以外の楽器を用いた創作活動を行う必要性を感じた。設問４では、94%の学生が「わらべうたや歌唱、簡易な楽器の演奏を通して、音楽表現の知識技能を向上する事ができた」と回答している。ストーリーの中にわらべうたを取り入れて物語を展開したグループもあり、感想には、「わらべうたを通じて、子どもたちと言葉の面白さや楽しさ、体を動かすことの楽しさに気づいていければいいなと思う」「簡単なリズムの繰り返しと様々な楽器の組み合わせで、素晴らしい合奏ができることに気づいた」との記述があった。簡易楽器を使った演奏では、既存の曲に学生が創作したリズムを重ねてアンサンブルを行なった。複雑なリズムは用いず楽器の重なり合う響きを感じ取ることを重視させたため、学生からは、「周りの音が聞こえるバランスを意識して、リズムを含めて一体感を出すことを学んだ」との感想もあった。設問５、７では、「幼児の表現の姿を考慮できたか」という視点から項目を設定した。特に、設問５では「非常にそう思う」を選択した回答者の割合が少なく、年齢に応じたねらいや内容を設定したものの、実際に幼児の表現の姿や音楽的発達に触れる機会がないため、発達段階に応じた遊び方のアレンジを加えることは困難であったと考える。この課題は、幼児の表現の姿について映像資料や事例を提示することや、子どもたちの前での実践を通して、幼児の音楽的発達への気づきと理解を促しながら克服していきたい。設問６の「他者との協働作業の中で、他者の表現を受容し学び合うことはできたか」では、受講生全員が肯定的な回答をしており、感想からは、互いの思いや考えを共有し他者のアイデアや表現を認め合う機会を得ることで、自分たちの作品が完成する喜びを実感していることが読み取れた。このように、保育者として子どもたちの感性や表現を受容し、共感していく姿勢は非常に重要な資質であり、「ドラムジカ」を創りあげていく中で学生同士の協同的学びを促すことができたと言える。設問８の「活動の映像を見ての気づき」について、大半の学生が自身や他者の表現から学ぶことがあったと回答している。各グループの「ドラムジカ」の発表は録画して、自身の表現を客観的に見て省察すること、そして、意見交換を通じて活動を振り返る機会を設けた。また、劇中の背景をパワーポイントで作成することや、事前に撮影・編集した動画と合わせて物語を進めるなど ICT を活用した演出を試みたグループも見られた。ビデオで振り返った全体の感想では、「『即興』の演技を生かし、仲間の反応を見ながら場面に応じて台本にない演技をすることがとても楽しかった」「自分たちのグループの合奏を客観的に聞くことができ、グループの良さや自分の良い所に気づくことができた」との記述があった。

これらの結果により、学生は「ドラムジカ」の創作を通して、他者との関わりの中で表現方法の多様性に気づき、音楽表現について新たな発見や考えを得ることができたと言えよう。また、実際の現場では子どもたちが日常的に親しんでいる歌を題材とするため、子どもたちが主体となり保育者との関わりを通して展開する音楽劇あそびとして、授業実践を通じてその手法を身に付けることは意義のある活動であると考える。

５．　まとめ

本研究では、幼児の音楽的な表現を支えるために必要な音楽の知識・技能を身につけるための指導法として、創作音楽劇「ドラムジカ」を導入した授業実践を提案した。まず、創造的音楽学習との関係性に基づき、戦後音楽教育における創作指導の歴史的変遷を概観した上で、その学習内容は音楽リテラシーを重視する流れにあることを確認した。また、創造的音楽学習の実践として「モノドラマ合唱」を取り上げ、山本（2000）の学習理論は、表現媒体・構成要素・形式原理から

成り立ち、音楽表現の「質」を高めることをねらいとした即興的な創作活動であることを確認した。

上記を踏まえ、創造的音楽学習の方法論を整理し「幼児と音楽表現」における学習内容への応用を検討した上で、創作音楽劇「ドラムジカ」の有用性を示した。まず、「ドラムジカ」は、保育者と子どもとの日常の遊びをストーリーに発展させる音楽劇であり、即興的な音楽遊びから活動を展開することができる。また、オリジナル劇であるため表現の自由度も高く、授業で得た知識・技能を柔軟に取り入れることができることも利点としてあげられる。未だ、保育者養成校での音楽表現活動はピアノを用いた活動に限定される傾向にあるが、「ドラムジカ」を導入することで学生は音楽表現を多角的な視点から学習できると考える。また、幼児の表現活動は音楽的技能の獲得を目指すものでなく、表現領域の理論的視点に基づき、その本質的意味について理解を深めさせる必要がある。今回の授業実践による成果と課題を踏まえ、保育の総合的な視点から捉えた体系的な授業内容を構築するとともに、より発展的な音楽活動の実践を試みることで新たな音楽表現の可能性を探求したい。

子ども学科・専任講師（音楽科教育）

注

１） 山本による造語で、「国語教材に取材した合唱曲をフィナーレとして用いるモノドラマのパフォーマンス」と概念規定されている。

２）「ドラムジカ」は、ドラマと音楽の組み合わせによる造語であり、伊藤嘉子により名付けられた。

引用文献

[1] 無藤隆ほか（2017）『幼稚園教諭養成課程をどう構成するか ～モデルカリキュラムに基づく提案～』，萌文書林

[2] 一般社団法人保育教諭養成課程研究会『平成 28 年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究－幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える－』，https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2017/05/19/1385791_7.pdf，2021 年 9 月 22 日最終閲覧

[3] 岡田暁子（2018）「保育内容「音楽表現」の指導法に関する一考察：ピアノ以外の楽器を用いた子どもの歌唱活動を想定して」『全国大学音楽教育学会研究紀要第 29 号』，pp. 1-10.

[4] 小池美知子（2017）「保育に特化した保育学生の音楽力量育成プログラムの開発 -音楽創作を軸とした授業実践を通して-」『松山東雲女子大学人文科学部紀要第 25 号』，pp. 28-41.

[5] 藤山あやか（2017）「アクティブラーニングを用いた授業実践 ～ドラムジカを中心に～」『全国大学音楽教育学会中・四国地区学会研究会』

[6] 島崎篤子（2010）「日本の音楽教育における創造的音楽学習の導入とその展開」『文教大学教育学部紀要第 44 号』，pp. 77-91.

[7] 山本文茂（2005）『モノドラマ合唱のすすめ 音楽教育の新たな構築に向けて』，音楽之友社，p. 13.

[8] 山本文茂（2005）前掲 7，p. 142.

[9] 山本文茂（2005）前掲 7，p. 103.

[10] 山本文茂（2005）前掲 7，p. 85.

[11] 田中路（2000）「即興演奏による音楽科指導理論 -「モデル」論を援用した学習の枠組みの提案-」『東京学芸大学大学

院連合学校教育学研究科芸術系教育講座博士論文』, p. 37.

[12] 清水桂子（2021）「幼稚園教育要領第 2 次改訂による領域「表現」の始期における総合性と保育者のかかわり：劇的な表現活動「ドラムジカ」と「ドラマティック・ミュージック・プレイ」に着目して」『北翔大学短期大学部研究紀要第 59 号』, pp. 95-105.

[13] 山本文茂（2005）前掲 7, p. 91.

[14] 伊藤嘉子（2000）『子どもとつくる劇遊び「ドラムジカ」』, 音楽之友社, p. 2.

参考文献

山本文茂（2005）『モノドラマ合唱のすすめ 音楽教育の新たな構築に向けて』, 音楽之友社

伊藤嘉子（2000）『子どもとつくる劇遊び「ドラムジカ」』, 音楽之友社